

琉球大学学術リポジトリ

Endgameにおける意識の曖昧性のテーマ

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉村, 清, Yoshimura, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/18228

Endgame における意識の曖昧性のテーマ

吉 村 清

Samuel Beckett の Endgame (1957) では、今日の西洋文化圏内の不条理の中で崩壊してゆく人間、病的なまでに腐敗し墮落しきった対人関係、目的性を喪失した言語行為等のやがて来る確かな終局がテーマとなっている。

劇中に登場する四人の Character たちは、同一生活空間を共有しているながら他者からも自己からも疎外化しており、狂気の生存のゲームの演技者であることを余儀なくされている。彼らをこのような孤立と狂気の生存へと追いやるのは、彼らの存在を条件づける外的状況からの圧力によるものではなくむしろそのように条件づけられた自らの存在のあり方においてその状況の意味を主体的に決定しえない意識の曖昧性によるものである。

本論文では各人物の保有する喪失寸前の意識のうちにみられる曖昧性によって、各人が刑罰的生の苦痛を余儀なくされていること、また各人にとって生存とは死よりも劣悪な習慣化し、やり直しのきかない自慰的演技にすぎないことを追求してみたい。

Hamm を中心とする四人の Character

この劇には、本来の意味での発端、中心部、終結と展開するいわゆるプロットが欠如している。また、主人公らしき Hamm を含む四人の Character も元来の意味からすると、真の人物とはいいがたく、彼らはむしろ意識の曖昧性の中にみられる種々のパターンの具体化されたものとしてみる方が妥当かも知れない。

しかし、プロットの欠如ほど、人物の喪失は明確にされてないことは疑えないので、この四人の相互依存の関係に重点をおいてテーマを追求してゆく。

足腰の自由を失った盲目の老人 Hamm は、すべてが荒廃してしまった外

界との接触を可能ならしめる左右の小窓のある殺風景で冷えきった部屋の支配者である。互解寸前の生活空間の権力者としての意識を反映してか、彼が不自由な身を託す車イスは常に部屋の中央に位置している。

同じ部屋の片隅には、両足を自転車旅行中に事故でなくしたHammの両親(NaggとNell)が砂の入ったゴミカンの中にその悲惨な生の営みを日々くり返している。二人は老衰の極限状態にあり、親としての権威を完全に失墜しており、人間を演ずる士気さえも喪失し、生への唯一の固執は食物への貧欲によってささえられている。しかし、母親のNellの場合はこのような食うことへの欲望はNaggと比較してさほど強くない。

召使であり、養子でもあるClovは下半身の麻痺によって肉体の自由を失ったHammの手足となって彼の生命を維持すること以外に何もしえず、主人への隷属を自己の本質と錯覚しかつその支配からも脱出を渴望しているが、なぜかそれも実行されないままに生きている。

HammとNagg

まず最初に、Hammと父親としての存在理由のほとんど消滅したようなNaggとのかかわりあいについて視点を置いてみよう。HammはNaggに対しては自分ではっきりと自覚できる感情とそうでないものを抱いている。

Hammは、苦悩に満ちた生存を今まで継続して忍耐してきた自らを憐れむと同時に、Naggを自分と同様に人生という自虐的で虚妄なゲームの共演者としてみる

Can there be misery-(He yawns)-loftier than mine?

No doubt. Formerly. But now? (Pause) My father?

(Pause) My mother? (pause) My…dog? (pause)

Oh I am willing to believe they suffer as much as such creatures can suffer. (Endgame p.1104.)¹

次に、Hammは焉終のなかなか訪れて来ない受難的生を嫌悪しつつも放棄することのできない自分にいらだちを感じ、生命の授与者としての

Naggをいみきらい呪う。

Nagg Me pap!

Hamm Accursed progenitor!

Nagg Me pap!

Hamm The old folks at home! No decency left! Guzzle, guzzle, that's all they think of. (p.1105.)

極度な老衰はNaggに幼児的退行をもたらしたようで、息子を単に生命の維持者としてしか意識できず、またHammの方も貧欲の醜いかたまりでしかない老人の愚劣さを罵倒する。

さらに、劇の中間部あたりでは、次のような会話を交しあう。

Hamm Scoundrel! Why did you engender me?

Nagg I didn't know.

Hamm What? What didn't you know?

Nagg That it'd be you. (pause) You'll give me a sugar.-plum?
(p.1112.)

無意味な苦の連続でしかない人生への呪いは、その根底に人間の行う生殖行為そして誕生をむごい偶然的な刑罪とみる暗くうずく感情を有するのである。余計な受難としての生存を余儀なくされたと思うHammは、徒労に終ることを知りつつ感情の爆発に溺れNaggに問いかけその責任を追求する。Naggは冷淡にもその責任を偶然へと転化する。その直後に、NaggがHammに要求するsugar-plumは、あたかも生殖、誕生、生命以上の価値を有すかのようにであり不毛な人生の営みの中に埋没してしまって生命の継続に何らの意義も見出しえない彼らの精神的貧困をよく象徴していると言えよう。

言いかえれば、誕生という人間にとって原質的命題に直面する能力を失い、下劣な食欲の奴隷となっている自己の状況を正確に認識しえない自分に全く無関心であることの悲劇性をNaggは理解しえないのである。同様

に、Hammも誕生を呪い、父を罵倒はしても、その呪いと罵倒の背後にあるものは何かという重要な疑問を持ちえず、呪いのための呪いでしかない言葉の空しさを自覚しえない点において、Naggと同質的な悲劇性の中に存在しているのである。

Endgameの世界では、自らの虚妄な精神生活を認識することは不可能であり、そうであればこそこのような悲惨な形の生存を耐えきれるとも言えよう。ジョン・モンタギューの主張にあるように、彼らにとってこのような苦難の状態のうちであって人間であることに堪える唯一の手段は、死よりも悪い麻痺なのである。² Hammの誕生、生命への呪いに代表される断続的に爆発する感情は彼にとっては何の意味を有せず、何の変化も救いの可能性さえも生みだす契機には決してなりえないのである。

Naggに対する憎悪と呪いは、無慈悲で残忍なサディズムへとHammをかりたてる。しかも、彼にとって生存の実感は、肉親になされる残酷でinhumanな仕打ちの中に起点を発し、愛や同情の介入を決して許容することのない冷酷な世界での自己に対する存在証明となっている。冷えきった部屋の中で、砂の入ったゴミカンの中で最悪の生活を強制されている両親のうちに、感覚的に生存を意識するのであるし、愛情不在の現実において憎悪感に忠実である以外すべがないのである。

しかし、HammうちにもNaggを父として認め求める働動的な渴望はある。彼は、発作的に思いつくままにClovに対して父の状態をたずねる習慣を保有している。Nellの生死を確認させた後、HammはClovにNaggの安否を問う。“And Nagg?” (p.1114.) Hammが父を名前で呼ぶのはこの一回きりであるが、Nellに対しとは死のまぎわになってもshe以外の呼び方をしない。

また、“Father (pause. Louder) Father!”となかば無意識的に叫び、ClovがNaggがビスケットをかじっていると報告すると“Life goes on.” (p.1115) と反応する。同様に、Hammが幕切れ近くになってあげる、“Father!”

も結局憎しみ対立していながらも、自分ではどうしても言語化できない父への抑圧されて枯渇したかのように見える素朴な欲望の現れとみる事ができよう。

言語化できない父らしさを備えた父の姿への渴望的側面と父を断続的に呼び求める習慣化した機械的発声行為としての側面が、Hammの意識と意識下の間に漠とした曖昧な形で存在しているのである。

それは、同質の血のつながりを求める本能の叫びかもしれないし、単に習慣化された言語的演戯かもしれない。あるいは、Nagg が約束の **sugar-plum** を与えられることを拒絶された時に述べられる暗闇で恐怖のうちに助けを求める彼の期待する息子像の投影かも知れないのである。

我々にとって、重要なことは上記の解釈の論理的妥当性を問題にすることではなく、ただ曖昧な形で抱いている父への意識が、無益な生の営みに呪縛された Hamm に一株の安堵感を保証していることを知覚すると言うことであろう。そしてこれは必要悪の相互依存の関係のうちに除々に互解の道をたどる者に占有を許される種類のものであろう。我々の対象とはなりえても、同化されて我々の共有できうるものではないのである。

次に我々の興味の対象となるのは、無為な終日の自慰的うさばらしにする Hamm の饒舌の相手としての Nagg である。

Martin Esslin によれば、Hamm は彼自身を話家として夢想しており、Nagg を聴手として語る話は科学的正確さでもって特徴づけられ、またそれは芸術作品としてよりはむしろ彼の属する世界で起った不可思議な災害の時に、隣人たちを救うことを無慈悲にも拒否したことから来る罪悪感の反映である。³

Hamm は、空腹の子供を一人残して彼のもとに物乞いに來た男の話をする。彼は結局その男の執拗な要求に折れ自分の雇い人にする事に決めるが、もし子供が生存しているなら一緒にひきとってもらえるかどうか尋ねられた時、どういう返答をしたのかを明らかにしない。ただ、その瞬間を

待ち続けていたというだけである。

It was the moment I was waiting for. (pause)

Would I consent to take in the child…(pause) (p.1113.)

道徳的決定を迫られる状況下において、主体的に意志決定のできない Hamm はこの話をそれ以上語り続けることを回避する。Hamm にとっては、他者への罪を意識するという事は冷たい機械的な言葉による演技でしかないようである。苦難にあえぐ隣人たちへの自己の保有している物資を供給すれば彼らを救うことができたであろうという後悔の念は時おり彼の心をよぎることはあるが、彼にとって重要なことは、何が語られているかではなく、なんらかの言葉を発するという行為自体であるし、彼のこのような行為をどのような形にせよ、お互いが許容し受け入れ合うという相互関係を確保したいという欲求が即刻に充足されるといういうことである。そして、この欲求は彼の有する曖昧な意識によっては決して明確に言語化されえないのである。

孤独苦と死よりも劣悪な習慣に呪縛された Hamm にとって恐怖となるのは、断続性に富む話の中に頻繁に介入して来る pause によって代表される沈黙であり、また常態化したあくびにそして停止してしまったような時間への無感覚にみられる倦怠である。

Hamm の話の本質は、沈黙への恐怖と倦怠に耐えるための慰戯にすぎないのである。高橋康也氏が指摘するように、言葉というものがいかに虚妄なものであるか、しかしまた人間にとってその虚妄な言葉がいかに不可欠なものであるかという、本気で反省すれば人を無限地獄に引きずりこまずにはおれないような恐ろしい問いが Hamm の空虚な自慰的話の中に奥深く根をおろしているといえよう。⁴

沈黙が Hamm の饒舌を無力化しても、逆に彼の饒舌が重苦しい沈黙の壁を破ってヒステリックに響こうが、言語を発するという行為自体が自己目的化した場合、言葉による現実からの脱出は不可能とならざるをえないの

だ。それでも、なお饒舌に必死になってしがみついてかまけることが、非人間的な生への唯一適応方法であることを無意識のうちに探りあてていることを意味するのかも知れない。この世界は饒舌なしでは生きてゆけないし、その無益性を認識できるような人間は存在を決して許され得ないのである。

HammとNell

我々は、HammがNaggを極度に嫌悪し罵倒しつつも両者の間にある必要悪的相互依存の関係なしでHammの存在は確立しえないように条件づけられといることを考察してきた。また断続的ではあるがHammはNaggを父として意識することがあり、父としてのNaggは極めて曖昧な存在のしかたではあるが彼の心中に定着化していることもみてきた。Naggの存在は、不条理性の中に不確定な生を送るHammに対してある種の安堵感を与えるものであることも疑えない。

これとは対照的に、Hammが母親のNellに対してもつ母親意識は無きに等しい。彼女を直接的に憎悪やサディズムの対象としたり、饒舌の相手となることを強要したりもせず、彼女の生死をClovに問う時も“Go and see is she dead.” (p.1114.)とNaggとの場合と異なり実際に名を用いることをしない。

一人として、健全な性的機能を有しない不能な男たちの中心となった狂気の世界では、生殖機能を喪失したNellの存在は冷淡に無視されている。Hammがどのくらい明確にNellに対する無関心を自分の意識の中に保有しているかは誰にも知りえないし、Hamm自身にも分りえない。

NaggとNell

Waiting for Godot (1952) では、エストラゴンとヴラジミールの二人にとって、ゴドーが来るか来ないのか確信が持てないにしても“待つ”という一貫した共通の意識が行為化されて二人の心を結びつけていた。NaggとNellにとって人生は、ゴミカンの中での強制された生を耐え忍ぶことで

ある。

本来の意味での愛はもはや存在しないこの不毛で枯渇した世界では、相手の背中を搔いてやること、相手を元気づけると言って昔の話を記憶の衰えに乗じて何度もしてやることが愛だと錯覚していること自体が形罰の生をどうにか堪え忍ぶ最後の手段になっている。

グロテスクな感傷に溺れる二人は生きているというより、感傷が二人にどうにか生を営んでいるのだと見分けのつく存在を保証していると言う方が妥当かもしれない。しかし、なぜこのように苦悶の中にあることの意識さえも放棄したかのような虚妄な生を日毎繰り返さねばならないかは、Nellのはく“Why this farce, day after day?” (p.1106.)にみられるように二人にとって永久に解決しえない、解決すれば今の形の生存の究極的崩壊をまねく以外ない性質のものである。

NaggとNellの世界を支配するのは、いまわしい習慣であり、沈滞しむなしく流れ去る時間でありそして彼らに人間であることを放棄させた惰性なのである。

HammとClov

HammとClovとの関係は劇の中では最も不条理性と多義性に富んでおりそれ故この劇の本質を現わすものである。

一側面からみると、彼らの関係は明らかに主従のつながりとしてみられる。盲目の主人に代りに左右の両窓から外界を観察しその結果を報告するのはClovの役目であり、下半身が麻痺したHammの手足となって彼の生命を維持してやるのも彼の任務である。Clovは、Hammの命に従って、ゴミカンの中の両親との連絡をとり、あるいは彼らを虐待するし、また饒舌の相手としての彼の存在はNaggよりも一層不可欠なものである。

しかし、さらに重要なことは、二人が交し合う対話の中にある。なぜなら、二人の対話には、お互がお互いにとってどういう意義を有する存在であるかという原質的疑問が断続的にではあっても一定のリズムの流れの中に

浮上して来るからである。

Hamm Why do you stay with me?

Clov Why do you keep me?

Hamm There's no one else.

Clov There's no where else (pause) (p.1105.)

Clov より外に人間がないということは、Hamm にてっと耐えがたいことであり、また独裁的な主人の世界以外に属する空間を有さないClovにとってHammに服従することはこの上ない苦痛なのである。

Clovに対して命令することしかできない主人に、服従することしかできない彼はその理由を問う。

Clov There's one thing I'll never understand. (He gets down)
Why I always obey you. Can you explain that to me?

Hamm No. Perhaps it's compassion. (Pause) A kind of great compassion. (Pause) Oh you won't find it easy, you won't find it easy. (p.1116.)

ClovはHammを嫌悪しており、常に彼の支配からの逃避を望んでいるが、そうすることができず、常に主人に隷属する自分を見出すのみである。

Clovにはそんな自分が全然理解しえないのであり、主人のHammの方も多分自分に対する憐憫の情からであろうと曖昧に返答することしかできない。

Hammの方は、Clovを所有することによって自己の本質の互解をまねきClovの方は自己をHammに譲り渡したままで二度と自己に還帰できない状態の中で生きているのである。そして、なお両方にとつと悲劇的と言えることは二人がなぜこういう形で結びついて、その常態化した結びつきが二人にとって不可欠な必要悪であるかを「多分…であるからであろう。」と言う曖昧な形でしか認識しえないということである。

二人が主従関係の中に体験することは、お互いがお互いにとって束縛し合い苦しめ合う存在であり、このような耐え難い状況を耐え忍ぶ道は習慣

のうちに麻痺してゆく以外ないということである。

Hammは、自虐的生を余儀なくさせられたことで父の **Nagg** を嫌悪しており、サディズムの対象として、**Nagg** への恐りは罵倒となって断続的に爆発する。また反面、憎しみほど強くはないが発作的に父の名を呼ぶ習慣に縛られていることによって一種の安堵感を抱いてもいることを考察した。

ClovはHammの妻子ではないが、父に対する歪んだ感情とは異質の感情をClovに対して持っている。偶然によって親子であることを条件づけられたことには激しくいらだつ彼も、自分の意志によって養子として引取ったClovに対しては父としての意識を有し、同生活空間の共有者であることを素直に認め、そしてClovにも認識させるように努める。

Hamm It was I was a father to you.

Clov Yes. (He looks at Hamm fixedly) You were that to me.

Hamm My house a home for you.

Clov Yes. (He looks about him) This was that for me.

Hamm (Proudly) But for me, (Gesture towards himself
no father. But for Hamm, (Gesture towards
surroundings) no home. (Pause) (p.1110.)

Clovに対して抱くこの感情は半ば意識的で不自然なものであっても、求えても求えぬ父への渴望と同様に、どうしても満たすことのできない欲求の現れとみることができよう。そして、このClovへの欲求は**Nagg** へ対してのものと同じように自己中心的なものである。それ故に、実の父を父として受入れることができず、また養子に対しては実の息子に対するような感情を抱きえない。言いかえれば、**Nagg** は感情のともなわない血肉のつながりの中に、Clovは父を演ずるHammの空虚な戯れの中のみ息子としての存在を許されるのであ。

次に、この劇の本質である人間の生存の不条理と孤独性の中で無目的な生に呪縛された二人の関係を追求してみよう。

Hammにとって、人生とは下半身の麻痺した肉体を車イスにゆだね、時間の流れの全く停止したような部屋の中で、饒舌を断続的に積重ねてゆくことであり、Clovにとつとは自分の占有できる唯一の場所である台所で主人の whistle を待つことであり、用事のない時は壁をみつめ続けることである。

二人にとって、人生とはClovのズボンの中にいるらしい一匹のノミや目覚時計の音に瞬間的に夢中になることであり、排泄的な生の燃焼を体験することである。また、Hammの場合は、車イスを部屋の中央に位置させることに全エネルギーを消耗すること、Clovは身の回りを整頓することにやっきとなることが生きることを意味するのである。

沈黙とあくびとの間に発せられる二人の言葉は、意志の疎通を計るための手段としての機能を消失し、無価値な音の混乱した集合でしかありえない。

誰も来ない、何も起きない中で、何かが二人の存在を無視して起こりつつあるという錯覚に突然とらわれたり、また蒔いた種が決し芽を出さなかったりする二人の共有する不条理な世界は、幕あきの際 Clov が一人演ずるグロテスクで馬鹿馬鹿しさに満ちたパントマイムによく象徴されている。HammもClovもこのような自虐性と不条理性に満ちた生存からの逸脱や逃避をどうにかして計り実現させたいという願望を持っているが、この願望は決して行為化されず常に全く関連性のない饒舌の中で忘却されてゆくだけである。

Hammの場合には現実からの脱出は、死への渴望、眠りと夢の中への沈潜、そして部屋の外の世界への幻想に現れてくる。

自らの生命を自らの手で絶つことのできないHammは、Clovにその役を命ずるが、拒否される。

Hamm Why don't you kill me?

Clov I don't know the combination of the cupboard. (Pause)

(p.1105.)

Clovの心中には、Hammへの憎しみと彼を殺したいという欲望があり、それが言葉となつて発せられることもある。“If I could kill him I'd die happy.”(p.1108.) 身勝手できまぐれな主人の命令に服従して馬鹿げた日々にくら嫌気がさしていてもHammの死への渴望を満してやることも、また彼の案に従つてお互いの命を絶つこともできないのである。

Hamm Why don't you finish us? (Pause) I'll tell you the combination of the cupboard if you promise me to finish me.

Colv I couldn't finish you.

Hamm Then you won't finish me. (Pause) (p.1110.)

死による苦難の現実からの脱出を現実できないHammは眠りと夢とそして幼稚な空想の世界への沈潜の中で自己放棄を求める。

Hammの夢にでてくるのは、緑深き森であり、そこで彼の情欲は回復し目は開かれ、手足は自由をとりもどし、また彼は自らの犯した罪によって苦しむこともないのである。この緑深き森の夢は、Hammが目覚めている時に口にする“*We'd need a proper wheel-chair. With big wheels. Bicycle wheels!*” (p.1108), “*Let's go from here, the two of us! South!*” (p.1109),そして“*But beyond the hills? Eh? perhaps it's still green. Eh?*” (p.1110.) に現われる自然が本来の姿をとどめている世界で自由な肉体的活動への渴望が現実においては満されないからこそ夢として存在するのである。

しかし、Hammは緑深き森の夢はあくまで非現実的な夢でしかないことを知っている。彼は、このような虚妄なロマンチズムに酔いしれる自分とは正反対の、虚無的で絶望的な自分の別の側面を自分の本質としてみることも決して忘れてはいない。それは、彼がClovを相手に行う饒舌の中の“*Outside of here it's death.*” (p.1105.) “*Beyond is the...other hell.*” (p.1108.),そして“*Use your head, can't you, use your head, you're on*

earth, there's no cure for that!" (p.1115.) に現われている。彼にとって外界は死以外何もない彼のいる生地獄とは異質の地獄であり、彼と同じように決して救われる可能性のない世界なのである。

Hammにとって死への渴望は決して行為化されず、眠りと夢の中に埋沈することは何らの解決も生みださず、また外界を美化しそこへの脱出を計ることはいたずらな徒労でしかないのである。Hammとは対照的に、Clovは死や夢を現実逃避の手段としてみなさず、外界をロマンチックにみることもしない。

Clovの心中にあるのは、Hammの召使いであり養子であることを余儀なくされている状況からの脱出のみである。しかし、この願望はHammの時と同じく決しと行為化されない。それは、彼がHammと共に一つの荒廃した精神の世界を保有しており、その中で主人の命令に従うという習慣に呪縛されているからであり、なぜそうなっているのかを明らかにすることができないからである。

Clovは、Hammの命令に服従することしかできない自分を理解できず、また彼を苦しめHammのもとを去ることのできない自分を理解しえない自分に対し“Why this farce, day after day?”と聞くことしかできないのである。またHammの方も、不毛と残酷の世界にあって、自らの眠りや夢、そして幻想や死のうちにその世界から逃避する方法を見出しえずどん底まで身を沈めてゆく以外なく、そのような自分を決して理解しえないのである。

Endgameの世界の人間にとって、その世界の外的意義は消失しており各自は自らの存在の内部から自らの世界を創りだそうとあるいは少くとも自らの存在目的を見出そうともがくが、そのもがきが断続的で習慣化しているがゆえに無益な徒労に終わってしまう。今日は昨日の繰返しでしかない麻痺のうちに生きる人間にとって、自分とは曖昧な存在でしかなく不安定な存在なのである。しかし、自分を曖昧にそして不安定な形でしか意識で

きないからこそ、この刑罰の連続である生という虚妄なゲームを演じられるのである。

しかも、彼らは演技者である自分の存在の無益性、不条理性を時たま意識しいらだつことはあっても、自らの力でこの狂気のドラマに終止符を打ち幕を下すことはできないのである。彼らは、幕が早く下ることを待ち続けるだけの存在なのである。そして、彼らは突然Clovの目を通して現われる小さな少年に、直観的に終局の到来を知るのである。そしてその終局は結局その到来を待つことが意味を有していないように、無意味なものであることは疑いない。彼らにとって、生も死も無価値なものであるから。

NOTES

¹Haskell M. Block and Robert G. Shedd, ed, *Master of Modern Drama* (New York: Random House. 1962), p. 1104.

(以下引用の際のカッコ内は同テキストのページを示す。)

²John Montague, *Samuel Beckett: Man and His Work*

(安堂信也他訳のノーベル文学賞全集17のp.177より)

³Martin Esslin, *The Theatre of the Absurd* (New York: Anchor, 1961), p. 33.

⁴安堂信也、高橋廉也共訳、ベケット戯曲全集Ⅱ(東京:白水社、1967) p.302.

BIBLIOGRAPHY

安堂信也訳、ノーベル文学賞全集17 (ベケット&ソルジェニーツィン)
東京:主婦之友社、1971.

安堂信也、高橋康也共訳、ベケット戯曲全集Ⅰ. 東京:白水社、1967.

安堂信也、高橋康也共訳、ベケット戯曲全集Ⅱ. 東京:白水社、1967.

Barnet, Sylvan.; Berman, Morton.; and Burto, William. *Aspects of the Drama*. Boston: Little Brown and Company, 1962.

Block, Haskell M. and Robert G. Shedd. ed. *Master of Modern Drama*. New York: Random House. 1962.

Brustein, Robert. *The Theatre of Revolt*. Boston: Atlantic-Little Brown, 1964.

Esslin, Martin. *The Theatre of the Absurd*. New York: Anchor, 1961.

Hesla, David H. *The Shape of Chaos*. Minneapolis: Th University of Minnesota Press, 1971.

大久保輝臣他、現代世界演劇の展望、東京:白水社、1972.